

伊藤由孝作 テーマ「迷い」③ 「**真のリーダーを探せ**」

川上正 あー、もうすぐ卒業か。たまんねえな。

ナレーション 正君は高校3年生。就職も決まり、もうすぐ卒業というのに、彼の心は複雑でした。

正 おれも4月から社会人か…。おれの…、おれの高校生活は――。

効果音 (機械工場)

ナレーション おれの高校生活は、一体なんだったんだ？ 今 振り返ってみても、何も無い。勉強したわけでもない。運動に汗を流したわけでもない。ただ毎日、単調な日々の繰り返しだ。

効果音 (玄関の戸の開閉音)

母 正、どこへ行くの？

ナレーション 正君は、急に何も言わずに外に出ていってしまいました。

正(モノローグ) 夕日が焼けに目にしみるな。

ナレーション 彼は、駅近くの歩道橋の上で、ぼんやりと夕日を眺めていました。すると、そこへ――。

正 あ、先輩。

先輩 どうしたんだよ、こんな所で？

正 先輩は？

先輩 おれ？ 会社の帰り。しかし久しぶりだな。茶店でも行くか。おごってやるよ。

ナレーション この先輩、正君が入部していた聖書研究会の会長でした。

効果音 (喫茶店内)

ウエートレス ご注文は？

先輩 コーヒー。川上は？

正 コーヒー。

先輩 お前は聖研ではいつも陰が薄くて、目立たない存在だったから、おれも気には留めていたんだ。で、聖研には出ているんだろう？

正 先輩、おれ、聖研は大分前にやめたんです。

先輩 やめた？ そうか。お前、何か心配ごとでもあるのか？ コーヒーも一口も飲んでないし、ここへ来るまで暗かったぞ。言ってみろ。

正 はあ。先輩、おれ、聖研に入ったきっかけは、あの「君にとって生きるってなんだ？」というポスターに引かれてだったんです。でも、おれ、おれには何もつかめませんでした。歩道橋の上でぼんやり夕日を眺めていたのは、むなしくて家にいられなかったんです。日が沈み、日が昇るように、僕の高校生活は毎日単調なことの繰り返しだったんです。それに4月からは社会人。おれみたいなダメな歯車が社会で通用するのかという不安もあるんです。

先輩 “歯車”か…。そうか、そんなに悩んでいたのか。川上の気持ち、分かるよ。おれも以前、川上と同じようなことで悩んだよ。そう、道しるべのない道で悩んだよ。“これからおれは一体どうなるんだ？”と。だが、そんな時、おれは聖書をお通してイエス・キリスト、神様を知ったんだ。教会の伝道会でな。

音楽 (BGM)

先輩 おれも、川上がいい“歯車”、社会の歯車だよ。ダメになったら捨てられる小さな部品ではない。こんな自分に、おれも時々むなしさを感じるよ。しかしな、おれには、いつでもそば

にいて力になってくれるイエス様がいるんだ。それに、道に迷った時は聖書が教えてくれる。

正 先輩。先輩はほんとに、そのイエス様を信じてんですか？イエス様を信じていれば、悩んだりしないんですか？

先輩 「悩まない」とは言わんさ。しかし、少なくとも、昔のように独りでよくよはしなくなったなあ。ほら、お前ともよく山に登ったが、初めての山に登った時ってのは怖いだろ？ だけど、ベテランのリーダーがいると、安心してついてけばいい。おれにとって、イエス様ってのは、そのリーダーなんだな。おれの人生のな。

正 “人生の… リーダー”か…。

聖書の言葉 「わたしは道であり、真理であり、命である。」(ヨハネの福音書 14:6)

<続>